

その声はせず

薄葉

茂宮城

聞き覚えのない蟬声に目をさまし水のみ干せばその声はせず
蟬声は夏の記憶を呼びもどす朝もやのなか駆けし昭和の
汗にじむ父の背中では夏の地図 乾地うるほす水耕の郷さと
蟬声とドリルの音が交錯しことしも始まる地震の補修
渾身の勝利つたへる原稿を出し終へて見る未明の半月

浅深

大西淳子*千葉

凸凹デコボコの生姜の凸を切り落としゆけば小さなトルソーとなる
蟬声に負けじと大き咀嚼音たててきゆうりの浅漬けを食む
all right はなぜ右なのか なつぞらに正しく夏の雲が湧きおり
万物のいのちの声を聞きたくて熱波の街に耳だけひらく
漬物づけに浅深あさふかありてももの思う夜には深き茄子漬けを食む

古絵はがき

河北笑子 神奈川

花びらの開けば供花にせんと思ふ高砂百合は台湾の花
灯あかりの及ばぬ闇に白々と浮き立ちにけり葎草の花
あぢさゐの花殻そのまま色保ち安倍元首相国葬のニュース
あぢさゐの硬き蕾に手を触れて生命いのちある身は息吐きにけり
ニューヨークツインズビルの古絵はがき、ビルも夫も今すでに無し

暗黒の顔

松下菜水 神奈川

向日葵は暗黒の顔を曝したり戦地に斃^{たふ}るる者のごとくに
いま、父の車椅子押す 幼き日われがブランコを漕ぎぬし庭に
電子パイプ銜へてをりぬあかねさす紫煙燻らす殿御なりしが
タンブルわれには刺繡たんぶる彼にはドラムの青春ありき
褪せやすき虹のやうなる思ひ出のひとつに数ふきみの笑窪も

白かたつむり

鮎川文子 東京

侵略も破壊も未だ続きをり月桃の葉は陽に輝ける
炎天の石垣の陰ひと粒の真珠のやうな白かたつむり
美^{ちゆ}ら海の碧をネイルに映したしその輝きもその悲しみも
父のない子らの葛藤垣間見て息を細めるリゾートホテル
海を見てただ海を見て南国のラムに小さな柑橘しぼる

山ふとところに

池田恭子 東京

山の家売却すると決めてよりすこし他人の貌の甲斐駒
吾子逝きし杉並の家に住みかねて逃避行せり八ヶ岳麓
七年がすぎて呼吸もしづまりぬ山ふところに深く抱かれて
ナスの牛キュウリの馬と桃葡萄どら焼きひとつ供へ迎へ火
今一度「ただいま」と言ひかへらむか耳の奥なるその声を恋ふ

瓜の粕揉み

山田宗夫 長野

畑小屋の外に掛けたる古時計見ては菓缶の麦茶飲みたり
木曾駒にけふ飼育より放たれる雷鳥二十羽乗せてへりゆく
おとなりの九十六歳に「行くんずら乗せて」と言はれゆく投票所
酒蔵が毎夏近所にふる舞へる粕まちてな為す瓜の粕揉み
広畑のどこの菜蔭に横たはる健忘翁のつかふスコップ

鯛だよね

小嶋啓生 愛知

手の利かねば舌にて広辞苑を繰るやまと言葉の森をさまよひ
あこのゑは鯛だよね 雨あとのペランダに出て さう、鯛さ
くれなゐの似合ふあなたと暗緑を好めるわれと聞く法師蟬
パソコンを見つめつつゐて亡き父の叱声を聴く もつと苦しめ
くちなしの香の闇ふかし狂ほしく睦み合ひたる夢覚めてなほ

とろとろ暮れる

山田恵里 愛知

日に幾度「校外警備」に行く教頭ポケットのたばこは見ないで送る
クレヨンピンクのやうな日日草蝶はいくども口刺しなほす
夕映えを凌霄花にうつし終へとろとろ暮れる八月の空
逆さまに電池を入れれば昨日へと巻き戻りゆく時計のあらむ
ホロコーストの本を読み継ぐ夏の空 電線あまた鉄条網めく

おたがひさま

吉本由美 大阪

まちがへて全件削除の電話帳くうくうばくばく宇宙に独り
シェーピングクリームのやうな雲うかぶ父の剃刀すてたかの夏
暑い日はサイダーがよろし炭酸の水車が喉をシュワワとまはる
引退馬ナイスネイチャー三十五歳にんじん好きで咀嚼音たかし
盆すぎても咲かぬあさがほ不器用はおたがひさまと水を注ぎぬ

無音の風鈴

小野はつね 兵庫

引出しに子の置きゆきし冬の鈴秋のオカリナ春の縦笛
たいくつがぶら下がつてをり八月のまひる無音のガラスの風鈴
寺内タケシ逝きて一年若者のギター離れをいふ朝の記事
スリーコード覚えておしまひ十七の初のバイトで買ったギターは
おばあちゃんと寝るとゴロゴロさんが来る去年の夏を忘れぬ三歳

がまだぜ!

立石千代女 長崎

たそがれどき叱られるか幾たびも野球部員のハイッがひびく
先輩の殻につかまり羽化せしか枝に空蟬ふたつ重なる
里帰りの次女は喘息起こしたり仲良しだった猫をさはりて
「甲子園でがまだぜ!夢翔」大判のブルーシートに黄の文字の映ゆ
空き家かと思ひてをれば室外機回りだしたり「生きてますよ」と